

# 校名：千葉大学教育学部附属特別支援学校

所在地：〒263-0001 千葉市稲毛区長沼原町312 電話番号：043-258-1111

記載日：平成28年 4月20日

記載者：渡邊 和弘

記載者役職：副校長

## 貴校の校風、おおまかな特色について：

小学部では生活単元学習、遊びの指導、日常生活の指導を、中学部では生活単元学習と作業学習を、高等部では作業学習をそれぞれの教育課程の中心に据えて学校生活を整え、児童生徒の充実した学校生活の実現に努めている。

児童生徒が、一定期間、一定のテーマをもって、できる限り自分自身の力で主体的に生活できるようにしている。「運動会」「ふよう祭」などの、学校全体で取り組む生活単元学習は、児童生徒会役員会が中心となって企画・運営している。児童生徒会の各委員会や学級が、それらの準備等の活動に取り組み、児童生徒が中心となって学校生活を進めている。

卒業後、働く生活を中心とした社会生活に確実につながるよう、働く活動を学校生活に大きく位置づけるとともに、社会とかわる生活を大切にしている。教育活動を地域の社会にも求め、中学部と高等部では、企業や施設などにおける現場実習を積極的に実施している。

## 貴校の卒業生の活躍状況について：

平成27年度末の小学部及び中学部卒業生の進路状況は、全員がそれぞれ中学部・高等部へ進学している。

高等部卒業生10名のうち、就職したものが5名、福祉施設関係へ進んだ者が5名である。

それ以前の3年間（平成24年度～平成26年度）では、就職がそれぞれ3名・4名・3名、福祉施設関係が7名・8名・8名である。福祉関係へ進んだ者の内、その後に就職した者が平成24年度卒業生で3名、平成25年度卒業生で1名いる。卒業時に生徒の状況を検討し、将来的な就職を目指して就労支援へと進むなど、多様な進路選択が増えてきている。

卒業生のアフターケアについては、基本的には過去3年の卒業生を対象としている。進路先や家庭への訪問と電話連絡を中心に行っている。

2年前、3年前の卒業生へは、夏季休業中にアフターケアとして、進路先への訪問と保護者への電話連絡を行い、現状の把握、課題の聞き取りなどを行い必要があれば対応している。前年度卒業生へは、4月、前期、後期の計3回、進路先や家庭と連絡を取りあったうえで、産業現場等における実習の期間に合わせて訪問を行い、困っていること、支援の工夫など本人や保護者、進路先の様子を実際に見に行ったり、聞き取ったりして対応している。

卒業時のスムーズな移行支援のため、障害者就業・生活支援センターなどの福祉関係とのネットワークづくりに努めている。そこでのネットワークが、進路先での定着を図る上でのキーワードとなっている。



## 貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

現状として本校の教員（副校長を含む）は、全員千葉県教育委員会からの人事交流者である。千葉県教委は本校への転入人事に関してかなりの配慮をしてくれている。

本校勤務経験者が公立学校等へ戻った後の状況については、確かな数字としては把握していないが、多くの人材が教育委員会や教育センター、現場の管理職など各方面で活躍しているという話をよく聞く。また、本校から転出した後も、公立学校での研修会の講師を務めたり、各学校で特別支援コーディネーターなどの専門性を活かした業務を務めたりしている。

## 魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

○小学部の遊びの指導や生活単元学習、中学部の生活単元学習や作業学習、高等部の作業学習などは本校が伝統的に行ってきた学習である。この部分は本校の強みであり、今後もこの形態での学習はなくなることはないと考えている。本校が長く大切にしてきた「合わせた指導」を児童・生徒の自立にどのようにつなげていくかを職員一丸となって取り組んでいる。研究活動でも、評価や児童生徒のチェック表などについての取り組みも増え、児童生徒の伸ばしたい力、卒業後の自立にむけての力をつけられるよう研究を進めている。

【小学部】の生活単元学習では、時期ごとにテーマを決めて活動を進めていく。全校で取り組む単元と、学級や小学部全体で取り組む単元がある。遊びの指導では、年3回体育館やグラウンドに「遊び場」を設定し小学部全体で取り組んでいる。一人ひとりの遊びの段階に合わせた遊具や場を設定し、主体的に遊びを展開でき、子ども同士の関わりが生じやすくなるように工夫している。



【中学部】の生活単元学習でも時期ごとにテーマを設定し活動に取り組んでいる。学級ごとに取り組んだり、学部全体、学校全体で取り組んだりする。作業学習では、学年を越えて縦割りで編成している。「あいそめ班」では本藍で糸やハンカチなどを染めている。特に糸は、高等部「手織り班」や近隣の福祉施設等の注文に応じて染めている。「えんげい班」では草花の栽培に取り組んでいる。種類や時期に応じて播種による栽培や苗の植えかえの栽培を行っている。「やきもの班」では石膏型を用いた泥しょう鑄込み成形、機械ろくろによる成形、たたら成形などによりカップや皿、小鉢などを製作している。



【高等部】の作業学習は木工班、農耕班、工芸班の3班からなる。学年をこえたいわゆる縦割りで編成される。各作業班ともそれぞれに主要な製品・生産物を決め、ほぼ年間を通して恒常的に取り組んでいる。生徒が目当てや見通しを持ち、意欲的・主体的に取り組めるよう、時期ごとにテーマを設定し活動にまとまりや節目をつけて展開するようにしている。製品作り・栽培活動を中心に、販売活動にも積極的に取り組むとともに原材料の注文・購入から、販売・会計までの一連の流れを生徒が主体となって運営できるようにしている。

これらの「合わせた指導」の取り組みは、知的障害をもつ児童生徒の教育において有効であり、県内外の特別支援学校で実践されている。公開研究会だけではなく、教員・保育士・保護者等多くの方が見学に訪れている。

○教育学部教員と本校教員の連携した研究活動「連携研究」に取り組んでいる。研究テーマは、本校の学校としての研究テーマではなく、学部・附属学校双方の課題意識からテーマを設定し取り組んでいる。本校では例年5～7本程度の連携研究を行っている。基本的に研究期間は1年間で、その成果を学部に報告している。また、その中で新たな課題が出てくるなど、必要があれば継続研究として行っている。附属学校1校だけでなく、他の附属学校とも連携することがあり、大学教員や他の附属学校教員との連携を深める上でとても有効な取り組みであるといえる。

平成27年度の連携研究テーマは以下のとおりである。

- ・附属学校園におけるスクールカウンセラーの活用に関する研究
- ・知的障害特別支援学校におけるヘルスプロモーションの研究
- ・卒業後を意識した作業学習における授業づくり
- ・特別支援学校における外傷発生状況と予防教育
- ・中学部段階における教育課程を考える
- ・遊び場づくりに対して教員集団が込める意図の検討

○授業研究会や公開研究会では教育学部と連携し研究を進めている。昨年度までは教育学部の教員を助言者としていたが、今年度からより連携を強めて研究を行うために、共同研究者として参加していただくこととした。これにより、学部と附属学校との連携がますます深まり、一緒に作り上げていく連帯感が生まれ、より良い研究となるだろう。それに合わせて講師・助言者は外部から招き、別な角度からの助言をいただくことで、多様な考え方を学ぶ機会となる。

○教育学部の教員を講師に招いて現職研修会を開催している。県内の特別支援学校にも呼びかけている。今日的な課題について本校・他校の教員が学ぶ機会となるだけでなく、他校の教員に本校を知ってもらうよい機会となる。人材育成は附属学校の使命の一つであり今後機能強化していく予定である。また、県立特別支援学校との連携も行っている。各県立特別支援学校で行っている校内研修会ネットワークの中に本校も入り、本校教員が参加する機会もつくっている。多彩な研修会が行われており、それぞれのニーズに合った研修を受けることができる。本校教員が講師をつとめることもあり、そういった意味でも貴重な機会となっている。

○本校の大きな学校行事の一つに「ふよう祭」がある。本校の学習活動への取り組みの発表の場としてだけでなく、地域の方との交流の意味もある。毎年、県内外の施設や企業から出店等の参加があり、本校の児童生徒の発表と合わせて近隣自治会や高等学校からのステージ発表での参加も多い。中学部や高等部では作業班ごとに模擬店を行い、作業製品や生産物、加工品などの販売も行っており、毎年数回行われる地域での販売会と併せて、生徒が販売活動を実際に体験できる非常に貴重な場である。来場者数は2000人とも3000人とも言われ、駐車場や食品などの確保が大変だが、子どもたちにとって貴重な場である事を考え、職員一同一丸となって取り組んでいる。

**地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：**

本校は地域の中で、地域と共に歩んできた学校である。本校の卒業式、入学式に30名近くの来賓を含め多くの地域の方が来校し、卒業や入学を共に祝ってくれる。また、ふよう祭、運動会などの行事にも多くの人々が訪れ、地域の中の学校として深く根付いている。また、本校からも地域の行事に参加するなど、積極的に関わりを求めている。

近隣には、本校の卒業生が多く在席する施設・法人があり、その中心に本校が位置する。この法人は本校の保護者（主に父親）が中心となり、学校も協力して立ち上げたものであり、その意味では本校が果たした役割は大きいと言える。

千葉市においては、養護教育センターを中心に、県立・市立・国立大学附属の特別支援学校がネットワークを組み、特別支援教育のセンター的機能を果たすよう、地域ごとに相談や支援を分担・連携し支援活動を行っている。具体的には、年1回各校の管理職、特別支援教育コーディネーター、研教育委員会や市教育委員会の担当者が連絡会議を行い、連絡調整がスムーズに行えるようにする。その後は担当者間で調整しながら情報を共有し支援を行って行く。本校は国立大学法人の附属の学校であるため、県立・市立の特別支援学校と同じような地域支援は難しい面もある。附属幼稚園、附属小学校、附属中学校への支援を地域支援ととらえ、学部の教員が分担し支援にあたっているが、今年度から附属特別支援学校の教員もそのチームに加わるようになった。支援が必要な児童生徒だけでなく、支援にあたる附属特別支援学校教員にとっても、専門家である大学教員と共に活動することで専門性を高めることになる。

千葉県においては、県教育委員会と良好な関係を築いている。本校の教員は全て千葉県からの人事交流者である。そこでは、初任者ではなく、ある程度の経験を積んだ教員を送ってくれている。本校としては、本校での勤務を通して力量を高め、県に戻ったときに活躍できる人材として育成する義務があると考えている。

また、本校の教員が、県内の公立学校の研究会・研修会の講師として派遣されたり、医療機関での勉強会・研修会、他大学でのゲストスピーカーとして派遣されたりもしている。地域の教育に対する貢献度は高いと自負している。

#### 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

○教員養成における教育実習の指導について、附属学校の役割として県内の公立の特別支援学校とは比べものにならない人数を受け入れている。本校は、特別支援学校教員養成だけではなく、インクルーシブ教育の視点から、通常の学校・通常の学級において支援を要する児童生徒の指導にあたる学級担任の養成において大きな力を発揮していると自負している。「教育は人なり」と言われるが、教育実習で自分の担当になった指導教員（教諭）によって、その後の教育に対する熱意、子どもに向き合う姿勢、専門性などが大きく左右されると言われる。本校の、レベルの高い実習生指導は、今後の教育を背負い、第一線で活躍が望まれる若い教員の養成において欠かすことのできないものだと考えている。

○本校の特色ある取り組みの一つに、生活単元学習や作業学習などの「領域・教科を合わせた指導」があげられる。千葉大学教育学部と本校が協力し、長く研究を積み重ね築いてきた学習方法であり、日本の特別支援教育に果たしてきた役割は非常に大きいといえる。社会や教育界、保護者のニーズの移り変わりはあるが、この学習方法は障害を持つ子どもたちにとって有効であることは間違いない。子どもたちのためにさらに研究を重ね、今日的な課題、ニーズに合った取り組みを行い、研究成果を発信していきたい。

○本校を中心とした近隣には、本校の卒業生が多く在籍する福祉法人がある。これは本校の保護者（特に父親）が中心となり、本校も協力しつつ発足し発展してきた福祉法人である。その設立については他法人の見本となるような取り組みもされ、そういった意味では、本校の果たした役割は非常に大きいといえる。現在は本校卒業生以外の利用者も多く在籍しているが、本校の職員が法人の理事や評議員を務めたり、法人の役員が学校評議員を務めたりするなど関係性は深い。学校と地域とのつながりを考える一つのモデルとなっている。